

令和5年度第39回全国高等学校新体操選抜大会審判員報告書

C3 審判長 安福康夫

1 採点上打合わせた事項

本大会は、選手の技術的価値や演技の熟練度において、大きなばらつきがあることを十分に考慮して採点業務にあたることを確認した。団体競技では、この時期は同じチーム内で選手の技術力に大きな差があることを前提に、どのような順位付けが望ましいかを話し合い、特に下位層での採点練習を重点的に行った。個人競技では、ジュニア時代から活躍している選手が多く、ハイレベルな試合が想定されるため、上位層での採点練習を重点的に行った。技に重きを置いた選手と動きの質に力を入れている選手などの見極めなどと採点について話し合った。構成実施それぞれの内容は、主任審判のレポートを参照してください。

2 採点上起こった事項とその処理

- ・入場時間オーバーになった選手について、音響業者と音楽係に確認をしたところ、音響機材に関わる問題が考えられたため減点なしと判断した事例が2件あった。
- ・ユニフォームの装飾が立体の花になっている選手がいた。確認したところ花びらの部分が固定されておらず、フリルのような状態になっていたため、ユニフォーム減点とした。

3 その他特記事項・意見・感想

今年度より5人制の団体になったことで、どのような変化が生まれるかが期待される大会であった。結果的には6人制との大きな違いは感じられず、どのチームもチームの実情に合った良い演技をしていると感じた。なかでも転回系で無理をさせず、選手が確実にできる内容にし、徒手の動きにこだわった演技をしているチームがいくつかあった。新体操の本当の魅力を感じさせる仕上げをしており感銘を受けた。

個人競技では、ほとんどの選手がジュニア世代から活躍している選手ということもあり、ハイレベルな大会となった。特に上位陣は全日本レベルに到達している選手もおり、夏の大会での再戦がたのしみである。その際は技よりも動きの質の差が問われるのではないかと感じた。

最後になりますが、本大会の運営に当たられたすべての役員・補助員の皆様に、素敵な大会を開催していただきましたことを、心から感謝の気持ちをこめて御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

1 採点上打合わせた事項

(1) 個人競技

- ・ 難度要素・要求要素・加点を見落とすことなく採点し、特に加点項目については許容範囲を確認して採用することを確認した。
- ・ 構成のAの部分（技術的価値・多様性など）をどのように評価するかについて、今年度の大会を振り返りながら、審判員の間で共通認識を持って採点に当たった。

(2) 団体競技

- ・ 初の5人制団体ということで、新構成になっているチームと、これまでの演技を5人用に組み替えているチームが混在しており、隊形移動などでの不自然さがないかどうかを見極め、5人制の団体作品としてまとまりがあるかどうかを評価することを確認した。
- ・ 出場チームの中でも、実力差があり、要素を満たさないチームやチーム内の選手の技術の差があることも想定されるので、演技全体の内容的な完成度を見極めて序列付けを行うことと、下位チームについては、どこまでを許容範囲として難度や技術的価値を認めていくかを確認した。
- ・ 技術的価値や多様性、音楽等に加え、難度要素・要求要素、加点を総合的に判断すること。また、団体競技として求められる同時的内容やその工夫された演技構成を評価し、選抜特有である、チーム内での個々の選手の実力差がどの程度存在しているかを見極めながら序列付けを行うこと。
- ・ 転回系群の各種スタート要素、難度や価値と徒手系技群の組み合わせについても十分に確認をし、疑義のある場合には確認すること。

2 採点上起こった事項とその処理

- ・ 個人競技においてユニフォームに関する減点があった。演技後に審判長が確認を行い、装飾がルールに抵触するものであったため減点処理を行った。
- ・ 団体競技において、転回系の要素不足・回数違反に当たるかどうか確認を要したチームが数チームあったが、明確に転回系が途切れているチームを減点とした。

3 その他特記事項・意見・感想等

まずは、大会運営に当たられた全国高体連体操専門部、(公財)日本体操協会、主管の埼玉県高体連体操専門部、補助役員の皆様のご尽力により大会が成功裏に終わったことに御礼申し上げます。特に会場が二転三転し、役員が手薄な中、器具の運搬・搬入などにご苦労なされながら、素晴らしい大会が行われたことに感謝申し上げます。お世話になりました。

個人競技については、ジュニアから競技を続ける選手が増え、以前に比べ、技術レベル

が格段に向上しています。特に上位選手の実力差は拮抗しており、大学生の選手にも見劣りしない実力を備えているので、夏のインターハイに向け、さらに高レベルの演技が出てくるものと期待します。新ルールも定着し、特に加点の取り方に関してはよく研究されており、上位選手は演技の中に自然と組み込むことができていました。

団体競技については、この時期にしてはかなり完成度の高いチームが増え、例年の選抜大会に比べても、全体のレベルが向上しています。ただ、中位～下位チームでは転回系の見せ方で、チーム内の選手に実力差がある中で、難度を取るために見にくい構成となってしまうチームが見られ、結果として、構成としてのまとまりを欠いてしまいました。単に難度を取るだけでなく、演技としての自然性、同時性を打ち出した演技が望ましいと感じました。また、徒手面で、止まって合わせるタイプと動きの中で形をそろえるタイプでは後者の方が構成としての難易度は高く、審判員として徒手の技術・多様性をどう評価していくか、採点結果として方向性を打ち出していく必要性を感じました。

近年、男子の新体操は確実にレベルアップしており、監督・指導者・選手の皆様の日々の努力に敬意を表します。審判員としても、作り上げた演技を確実に適正に評価できるよう今後も研修を重ねてまいります。

C3 実施主任審判員 林 文夫

1 採点上打合わせた事項

(1) 団体・個人共通

- ・本大会は、選手にとっては来年度に向けて新しい演技の発表の大会でもあり、団体においては5人制導入の初めての大会でもあることを鑑み事前研修を行った。また、熟練性に欠ける大会でもあることと下位層の選手が出場することを考え、採点についてA減点の部分とB減点の部分をもどのように減点するのかを映像での確認を行った。
- ・採点については、減点ばかりをするのではなく演技のよかった部分、作品全体としての徒手の部分の出来栄を見えることを確認した。
- ・基本的な運動ができているか、特に徒手系運動の質に関する部分を（A減点の部分）確認すること、緊張と弛緩、重心の引き上げ、運動の幅、上半身の運動だけでなく下肢の部分（踏み込みの深さ、四肢の制御）を確認した。

(2) 個人競技

- ・運動の質をきちんと見る事、ミスがない、きれいにできている等でごまかされないような採点を行うことの確認。
- ・シェネやタンブリング時の軸ブレ及び膝の割れ、着地姿勢、空間姿勢の減点幅の確認。
- ・手具の特性が生かされているか、身体との一体感はあるのか等の確認。
- ・4種目あり演技の出来栄には差が出てくることが考えられるので目の前の演技をしっかりみて採点を行うことの確認。

(3) 団体競技

- ・5人の団体となるが、採点については今までと同じように行う。但し、6人の団体を単に5人で行う場合と5人での調和を取りながらの運動では実施でも違いが出てくるのでその点を確認した。
- ・全体の運動の質をみて、平均化してAの部分の減点を行うことを確認した。
(運動の質が、全員揃っている場合と数名が違う場合が想定されることの確認)
- ・転回系、徒手系のミスをした時(B減点の部分)の減点幅の確認。

2 採点上起こった事項とその処理

特になし

3 その他特記事項・意見・感想

(1) はじめに

大会運営に当たられた全国高体連体操専門部、(公財)日本体操協会、埼玉県高体連体操専門部、補助役員の皆様のご尽力により大会が成功裏に終わったことにお礼申し上げます。

(2) 個人競技

- ・新しいルールに変更され期間が立ち、徐々に選手・指導者もルールに対しての対応が浸透してきているように感じた。また、技術レベルが向上してきているだけに演技に求める方向性を変えてきている選手もいた。
- ・運動の質に関する部分で上下の運動が少ないように感じる選手が多く、上半身は使おうとしているが下半身と上半身の運動性があまり見られなかった。
- ・上位選手は、ジュニアから全国大会に参加しており場慣れしているようでミスも少なく熟されていた。

(3) 団体競技について、

- ・5人制団体としてはじめての大会となったがあまり違和感を感じることはなかった。
- ・5人制では、選手間の力の差が目につきやすく、全員が同じレベルのチームと差があるチームの比較で採点が難しいと感じることがあった。
- ・高校から始めているような選手が多いチームでも、徒手の運動の質をあげる事でA、B減点の部分が共に少なくなり、実施としての点数が構成を上回るチームがあった。無理な転回系(タンブリング)を行うよりも良い演技として評価できるチームがあった。
- ・上位チームは、大きなミスもなくある程度、完成されており高校総体等今後の演技の出来栄えが楽しみである。中位レベルのチームが多く運動の質で差を付けることに苦慮し、審判の点数にばらつきが出ることがあった。

以上のことが今大会の意見・感想であるが、今後の全国レベルの大会が楽しみとなる大会であった。